2014 年度若手研究助成研究報告書

インターネット上での他者情報公開に関する心理学的研究

―若年層を対象として―

研究代表者
愛知学院大学総合政策学部
太幡　直也

１．まえがき

インターネット（以下、ネット）利用者には、他者のプライバシーを侵害しないよう、ネット上での他者情報の扱い方に留意することが求められている。このことは、情報リテラシー教育でも取り上げられている。

一方、最近では、ネット上での他者情報公開に関する社会的問題が話題となることも多い。例えば、ネット上に別れた相手の画像や動画を了解なく公開する“リベンジポルノ”と呼ばれる現象や、インターネットで事件の加害者やその家族の個人情報をさらす“ネット私刑（リンチ）” という現象が話題を集めている。実際、代表的なソーシャル・ネットワーキング・サービス（Social Networking Service、以下 SNS）の一つである Facebook の 10 代の利用者を対象にした調査（Christofides, Muise, & Desmarais, 2012a）では、SNS 上の他者情報公開がネガティブな感情を喚起する経験となっていることを示唆している。この調査では、SNS 上で不快な出来事を経験した者の約 17%が、自分が望まないのに他者に自分の情報を投稿された、もしくは、他者が望まないのにその他者の情報を投稿したという経験を報告している。これらの事柄は、他者のプライバシー侵害にあたると考えられる。

ネット上での他者情報公開に関する社会的問題がみられる昨今の現状に鑑みると、多くの者がより安全にネットを利用するため、ネット上のプライバシー侵害にあたる他者情報公開を抑止するための知見が社会的に求められているといえる。特に、高校生、大学生といった若年層のネット利用者を対象とした研究が必要であると考えられる。理由としては、若年層は、ネット上での情報リテラシーを十分に獲得しておらず、情報の扱い方に関する知識が不足していると考えられる点、Facebook や Twitter などの不特定多数の人が閲覧可能なツールの利用者が多いことが挙げられる。若年層に着目することにより、プライバシー侵害にあたる他者情報公開を抑止する方策の提言に加え、情報リテラシー教育への新たな提言も可能になると期待される。

ネット上の情報公開に関する研究　ネット上の情報公開に関するこれまでの心理学的研究では、自己情報公開に着目し、自己情報公開を規定する要因を検討した研究が多く行われてきた。以下、代表的な研究を三つ挙げる。

Christofides, Muise, & Desmarais（2009, 2012b）は、Facebook の利用者に Facebook 上での自己情報公開可能性を評定するように求め、公開可能性の判断を高める要因を検討した。そして、二つの心理的要因が公開可能性の判断を高めることを示した。す

なわち、準拠集団の成員から人気を得たいという欲求である人気希求（Santor, Messervey, & Kusumakar, 2000）の高さ（Christofides et al., 2009, 2012b）、情報公開することで生じる結果に対する意識の低さ（Christofides et al., 2012b）である。上記の結果は、18 歳以下の者とそれ以上の者で同様にみられている（Christofides et al., 2012b）。

太幡・佐藤（印刷中）は、mixi（代表的な SNS の一つ）利用者を対象にウェブ調査を実施し、プロフィール上での自己情報公開を規定する心理的要因を検討した。自己情報公開として、不特定他者に公開している情報数、公開内容に自己に関する事柄を含めている程度（自己表出性）に着目した。心理的要因として、自己情報を他者に伝達することを統制しようと思う程度である情報プライバシーに着目し、ネット上の情報プライバシーの個人差を測定する、ネット版プライバシー次元尺度（Multi-dimensional Privacy Scale for Internet users: MPS-I; 佐藤・太幡, 2013）を用いて検討した。その結果、MPS-I の属性情報（e.g., 性別）、識別情報（e.g., 本名）への情報プライバシーが低いほど、不特定他者への自己情報公開数が多く、また、プロフィール上の自己表出性が高いことを明らかにした。情報プライバシー以外の心理的要因については、人気希求が高いほど、プロフィール上の自己表出性が高いという、Christofides, et al.（2009, 2012b）と整合する結果を示した。また、犯罪被害へのリスク認知が高いほど、プロフィール上の自己表出性が高いことを明らかにした。

Taddicken（2014）は、SNS も含めたネット上で公開したことがあるか否かを評定するように求め、公開経験を規定する要因を検討した。その結果、自己開示欲求が高いほど、ネット上で公開したことがある情報数が多いことを示した。一方、ネット上でのプライバシー侵害への懸念は公開経験への影響はみられないことも明らかにした。Taddicken（2014）で明らかになった、ネット利用者がプライバシー侵害を懸念していても、実際のネット上の行動にはその懸念が反映されていないという現象は、プライバシー・パラドックス（Barnes, 2006; Taddicken, 2014）とよばれる。

また、自己情報公開が迷惑行為被害に影響する可能性があることも示唆されている。太幡・佐藤（2014a）は、SNS 上で自己情報を多くの他者に閲覧可能な状態にしているほど、他者から望まない連絡を受けるという迷惑行為被害経験が多いことを示している。

一方、これまでの研究では、ネット上の他者情報公開について、心理学的観点から検討した研究はほとんどみられない。ネット上での他者のプライバシー侵害にあたる他者情報公開を抑止する方策を得るためには、ネット上の他者情報公開に着目した研究が必要になると考えられる。

２．本研究の目的

以上のことから、本研究では、高校生、大学生といった若年層のネット利用者を対象とし、ネット上での他者情報公開を規定する要因について、心理学的観点から検討することを目的とする。そして、他者のプライバシーへの配慮の低さがネット上の他者情報公開を促すという概念モデル（Figure 1）を想定し、検証することとする。

他者のプライバシーへの配慮は、これまでの研究では、他者のプライバシー意識（他者のプライバシーへの意識の向けやすさ）として扱われている。以下、他者のプライバシー意識に関する研究を概観する。

Figure 1
想定する概念モデル

他者のプライバシー意識　プライバシーは、自己情報に対する他者からのアクセスの規制と定義される（e.g., Altman, 1975）。“プライバシー”への意識の向けやすさは、プライバシー意識とよばれる。

プライバシー意識には、他者のプライバシー意識の他に、自己のプライバシー意識（自己のプライバシーへの意識の向けやすさ）がある。Petronio & Durham（2008）は、コミュニケーション・プライバシー・マネジメント理論において、プライバシー維持のために自他のプライバシー境界の重なりが調整されると論じている。このことから、自己のプライバシー意識と他者のプライバシー意識は同時に生起すると考えられる。

自己のプライバシー意識、他者のプライバシー意識には個人差があるとされ、個人差を測定する尺度が作成されている（太幡・佐藤, 2014b）。太幡・佐藤（2014b）は、プライバシー意識尺度（Privacy Consciousness Scale; 以下、PCS）を作成した。因子分析の結果、PCS は、“自己のプライバシー意識／維持行動（e.g, 他人にプライベートな質問をされたくない）”、“他者のプライバシー意識（e.g, 普段から知らない人のプライバシーを気にしながら行動している）”、“他者のプライバシー維持行動（e.g, 友人が電話で会話している内容を聞かないようにしている）”の三因子に分類された。“他者のプライバシー意識”、“他者のプライバシー維持行動”が、他者のプライバシーへの配慮に関する因子である。自己のプライバシー意識と維持行動は同一の因子となったのに対し、他者のプライバシー意識と維持行動は別の因子となり、両者には有意な正の相関がみられなかった。加えて、友人と見知らぬ人に関するプライバシー意識や維持行動に関する項目は同じ因子に含まれたため、他者へのプライバシー意識と維持行動には関係性の違いがみられないと考えられる。

プライバシー意識と実際の行動の関連については、自己のプライバシーを扱った研究から、プライバシー意識が実際の行動に影響を及ぼすと予測される。例えば、プライバシー意識と関連すると考えられる情報プライバシーに関する研究では、情報プライバシーがネット上での自己情報の扱い方に影響することが示されている。太幡・佐藤（印刷中）の、MPS-I の属性情報、識別情報への情報プライバシーが低いほど、不特定他者への自己情報公開数が多く、また、プロフィール上の自己表出性が高いという知見は、その一例である。その他にも、MPS-I の属性情報、識別情報、自伝的情報（e.g., 悩み事）への情報プライバシーが低いほど、ネット上でのプライバシー維持行動（e.g., 自分のことをあまり書かない）をとっていない傾向があることが示されている（佐藤・太幡, 2011）。

以上のように、自己のプライバシー意識に関する研究の知見に基づくと、概念モデル（Figure 1）のように、他者のプライバシーへの配慮の低さがネット上の他者情報公開を促すと予測される。

本研究の構成　本研究の目的は、高校生、大学生といった若年層のネット利用者を対象とし、ネット上での他者情報公開を規定する要因を検討することである。他者のプライバシーへの配慮の低さがネット上の他者情報公開を促すという概念モデル（Figure 1）を検証する。

一方、ネット上の他者情報公開について、心理学的観点から検討した研究はほとんどみられない。したがって、概念モデルの検証に先立って、ネット上での他者情報公開の実態を把握する必要があると考えられる。

以上のことから、本研究では以下の二つの実証研究を実施する。研究１では、若年層のネット上での他者情報公開の実態について検討する。研究２では、研究１で得られた結果を踏まえ、若年層のネット上での他者情報公開を規定する心理的要因を検証する。

３．研究１

目的

研究１の目的は、若年層のネット上での他者情報公開の実態について検討することである。具体的には、大学生を対象に、半構造化面接を実施する。他者のプライバシー侵害に関わる他者情報公開に着目するため、ネガティブな感情を喚起する他者情報公開に着目する。そして、多くの経験を抽出するため、（ａ）インターネット上で、他人の情報を公開し、その人を嫌な気持ちにさせてしまった経験（以下、公開した経験）、（ｂ）インターネット上で、他人に自分の情報を公開され、嫌な気持ちになった経験（以下、公開された経験）の二側面から経験を抽出する。

方法

調査対象者　大学生 20 名（男性 10 名、女性 10 名、平均年齢 20.35±0.75 歳）に個別に半構造化面接を実施した。

手続き　面接者（大学生、21 歳、女性）が、公開した経験、公開された経験ごとに、以下の質問に回答するように求めた。公開した経験、公開された経験に回答を求める順序は、カウンターバランスをとった。調査時間は約 30 分であった。

質問内容　公開した経験、された経験のどちらの経験も、“公開した（された）内容（以下、内容）”、“相手との関係（以下、関係）”、“公開した（された）手段（以下、手段）”、“公開した（された）後の相手との関係の変化（以下、変化）”に回答するように求めた。加えて、公開した経験は、“公開した理由”、“相手の気持ちを知った経緯” にも回答するように求めた。一方、公開された経験は、“嫌な気持ちになった理由”、“嫌な気持ちになったことを相手に伝えたか”にも回答するように求めた。公開した経験、公開された経験のそれぞれに複数の経験がある場合には、それぞれの経験について想起するように求め、質問を繰り返した。

データの分類　それぞれの項目について、回答の結果得られた事柄に基づき、大学生 2 名（ともに女性）が KJ 法（川喜田, 1967）によりカテゴリーを作成した。

結果と考察

得られた経験の個数　調査対象者から得られたのは、公開した経験 29 場面、公開された経験 33 場面であった。公開した経験、公開された経験とも、全員から経験が抽出された。一人あたりの経験の言及数について、公開した経験（M=1.45, SD=0.60）と公開された経験（M=1.65, SD=0.59）に有意差はみられなかった（$t(19)=1.16$, ns）。

公開した経験、された経験を設定したのは、多くの経験を抽出するためであったため、以下、質問項目ごとに、公開した経験、公開された経験を合わせた結果を示す。なお、それぞれの質問項目について、公開した経験、公開された経験に大きな違いはみられなかった。

内容　“写真”（40.3%）、“名前”（24.2%）、“悪口”（11.3%）、“出来事”（11.3%）、“内輪ネタ”（4.8%）、“趣味”（3.2%）、“SNS の ID”（3.2%）、“出身高校”（1.6%）の８カテゴリーに分類された。ネット上の情報プライバシー（佐藤・太幡, 2013）のうちの写真や名前といった識別情報が多く挙げられたため、他者情報公開の問題は識別情報の公開に関するものが多いと考えられる。

関係　“友人”（77.4%）、“目上の人”（11.3%）、“立場が同じ人”（8.1%）、“目下の人”（1.6%）、“元恋人”（1.6%）の５カテゴリーに分類された。関わりの多い者との間で他者情報公開の問題が生じている場合が多いと考えられる。

手段　“Twitter”（61.3%）、“LINE”（16.1%）、“Facebook, mixi”（9.7%）、“ホームページ”（4.8%）、“Skype”（4.8%）、“動画投稿サイト”（3.2%）の６カテゴリーに分類された。プライバシー侵害に関わる他者情報公開は、Twitter で生じやすいと推察さ

れる。

変化　“変化なし”（74.2%）、“距離を置いた”（11.3%）、“和解した”（11.3%）、“距離が縮まった”（3.2%）の４カテゴリーに分類された。“変化なし”が多かった理由としては、関係に影響するようなネガティブな感情を強く喚起した経験が少なかったことが影響した可能性が考えられる。

公開した理由　公開した経験についてのみ回答するように求めた質問項目であった。“面白かったから”（24.1%）、“会話の流れ”（24.1%）、“思い出だから”（17.2%）、“頭にきたから”（13.8%）、“第三者に聞かれたから”（6.9%）、“伝えたかったから”（6.9%）、“許可を得たから”（3.4%）、“他の人も知っていると思ったから”（3.4%）の８カテゴリーに分類された。情報公開について相手から許可を得ていない場合が多いと推察される。

相手の気持ちを知った経緯　公開した経験についてのみ回答するように求めた質問項目であった。“対面で直接言われた”（37.9%）、“CMC 上で言われた”（37.9%）、“相手の様子から推測した”（13.8%）、“第三者に言われた”（10.3%）の４カテゴリーに分類された。他者情報を公開された相手から嫌な気持ちになったことを直接伝えられている場合が多いと考えられる。

嫌な気持ちになった理由　公開された経験についてのみ回答するように求めた質問項目であった。“無断で公開されたから”（33.3%）、“特定されるのが不安だから”（27.3%）、“名前を公開されたから”（15.2%）、“顔写真を公開されたから”（9.1%）、“間接的に言われたから”（9.1%）、“関係が壊れるか不安だから”（3.0%）、“本音が聞けたから”（3.0%）の７カテゴリーに分類された。主な理由としては、情報公開を自分で統制する権利を奪われたことと、写真や名前といった識別情報を公開されたことが挙げられると解釈できる。

嫌な気持ちになったことを相手に伝えたか　公開された経験についてのみ回答するように求めた質問項目であった。“伝えていない”（54.5%）、“はっきり伝えた”（33.3%）、“遠まわしに伝えた”（12.1%）の３カテゴリーに分類された。嫌な気持ちになったことを公開した者に明確に伝えていない場合が多いことが示された。情報を公開した者は、公開された者が嫌な気持ちになったことに気づいていない場合も多いと推察される。

４．研究２

目的

研究２の目的は、研究１で得られた結果を踏まえ、若年層のネット上での他者情報公開を規定する心理的要因を検討することである。他者のプライバシーへの配慮の低さがネット上の他者情報公開を促すという概念モデル（Figure 1）を検証する。

ネット上での他者情報公開を規定する心理的要因として、他者のプライバシーへの配慮に関わる他者のプライバシー意識、他者のプライバシー維持行動に着目する。加えて、自己のプライバシー意識、人気希求、犯罪被害リスク認知（犯罪に遭うことに対するリスクの認知）、他者に対する優越感の四つの心理的要因にも着目する。

自己のプライバシー意識に着目する理由は、太幡・佐藤（2014b）において、自他のプライバシー意識が対比的に扱われているためである。他者のプライバシー意識に加え、自己のプライバシー意識も扱うことで、プライバシー意識全体が他者情報公開にどのように影響するかを包括的に理解できると考えられる。

人気希求、犯罪リスク認知に着目する理由は、mixi のプロフィール上での自己情報公開を規定する要因を検討した、太幡・佐藤（印刷中）と結果を対比させるためである。太幡・佐藤（印刷中）では、自己情報公開を規定する要因として、人気希求、犯罪被害リスク認知が取り上げられている。したが

って、これらの要因に着目すると、自己情報公開と他者情報公開に対する人気希求、犯罪被害リスク認知の影響を対比的に捉えることができると考えられる。

自己に対する優越感に着目する理由は、他者に対する自己の優越性を感じると、他者情報を軽視する結果、他者情報を公開しやすくなると予測されるためである。そこで、自己の重要性に対する誇大な感覚である自己愛の一側面である、優越感・有能感に着目する。

また、他者情報公開について、情報公開手段によって公開の仕方が異なることを考慮し、研究１の“手段”で多く挙げられていた Twitter に着目する。Twitter は、SNS の一つであり、140 字以内の文章をネット上に投稿できるという特徴がある。自分の作成した文章を投稿するのに加え、他のユーザーの投稿（ツイート）を転載するリツイート、知人や有名人のツイートをリアルタイムで表示するフォローなどの機能がある。自分のツイートをフォローする人は、フォロワーとよばれる。また、自分のアカウントに、投稿などを特定の人にしか公開しないように“鍵をつける”ことも可能である。なお、研究１の“関係”で友人など関わりの多い者が多く挙げられたこと、Twitter では有名人などの関わりのない者の情報がツイートされる可能性があることを考慮し、研究２では、情報公開の対象となる他者は、友人・知人に限定する。

以上をまとめると、研究２では、Twitter 上での友人・知人に関する情報を最近のうちに公開した経験やその回数に回答するように求める。そして、Twitter 上での他者情報公開経験を規定する心理的要因を、重回帰分析により検証する。

なお、太幡・佐藤（印刷中）では、心理的要因を説明変数とする重回帰分析を行うにあたり、回答者の性別、年齢、mixi へのアクセス頻度、マイミク（相互に友人として登録した利用者）数、参加コミュニティ数を統制変数としていた。このうち、mixi へのアクセス頻度は利用状況に関する変数、マイミク数、参加コミュニティ数は対人関係に関する変数である。そこで、Twitter 上での他者情報公開を検討するにあたり、Twitter 利用状況、Twitter 上での対人関係に関する変数を統制変数とする。

方法

調査対象者　インターネットアンケートサービス“マクロミル”のモニター（1,182,574 名、2015 年 10 月 1 日現在）を対象とした。現在、Twitter を利用している高校生、大学生のモニターに調査ページの URL を含むメールを配信した。そして、2,060 名（男性 587 名、女性 1,473 名）から回答を収集した。平均年齢は 19.25 歳（*SD*=1.94）であった。データ品質の劣化を防ぐため、きわめて短時間で回答されたデータは削除されていた。調査対象者の属性を Table 1 に示す。

調査時期　2015 年 6 月 24 日から 25 日に実施した。

Table 1
調査対象者の属性（*N*=2060）

属性		度数
性別	男性	587
	女性	1473
所属	高校	504
	大学	1511
	短期大学	45
居住地域	北海道地方	80
	東北地方	118
	関東地方	784
	中部地方	319
	近畿地方	437
	中国地方	90
	四国地方	36
	九州地方	196

注）高校には高等専門学校も含まれる。

調査項目　調査項目は（a）～（d）の順に回答するように求めた。（a）Twitter 利用状況：１日あたりの平均利用回数（ツイート回数、リツイート回数）に回答するように求めた。その他、利用開始年、利用アカウント数、鍵付き利用アカウント数などについても質問した（本稿では割愛する）。（b）Twitter 上の対人関係：Twitter 上で交友している人数（フォロー数、フォロワー数）に回答するように求めた。（c）他者情報公開経験：Twitter 上の他者情報公開経験を測定するために、研究１で公開した（された）内容を参考に、20 項目を作成した。作成にあたり、佐藤・太幡（2013）の MPS-I の属性情報（e.g., 性別）、識別情報（e.g., 本名）、自伝的情報（e.g., 悩み事）に対応するように考慮した。そして、“最近１カ月のうちに、以下の情報を含めたツイート、もしくはリツイートを何回しましたか。”と教示し、４件法（０．全くない、１．１回だけ、２．２・３回、３．何回も）で回答するように求めた。なお、他者情報公開経験に先立って、同様の項目で自己情報公開経験についても回答するように求めた（本稿では割愛する）。（d）心理的要因：プライバシー意識は、太幡・佐藤（2014b）の PCS の 15 項目を用いた。自己のプライバシー意識／維持行動、他者のプライバシー意識、他者のプライバシー維持行動の三つの尺度について、“１．あてはまらない”から“５．あてはまる”の５件法で回答するように求めた。人気希求は、人気希求尺度（Santor et al., 2000）の邦訳版（太幡・佐藤, 印刷中）12 項目（e.g., 人気を得るためなら、普段しないようなこともしてきた）に、“１．全くあてはまらない”から“７．非常にあてはまる”の７件法で回答するように求めた。犯罪被害リスク認知は、犯罪に対する反応尺度（荒井・吉田, 2010）の下位尺度である犯罪被害リスク認知尺度３項目（e.g., 自分が犯罪の被害にあう可能性は高い）に、“１．全くそう思わない”から“５．非常にそう思う”の５件法で回答するように求めた。自己に対する優越感は、小塩（1999）の自己愛人格目録短縮版（NPI-S）の下位尺度である優越感・有能感尺度 10 項目（e.g., 私は、周りの人たちより、優れた才能を持っていると思う）に、“１．全くあてはまらない”から“５．とてもよくあてはまる”の５件法で回答するように求めた。

結果

Twitter 利用状況　１日あたりの平均利用回数の記述統計を Table 2 に示す。ツイート回数、リツイート回数ともに分布の偏りがみられ、かつ０回という回答がみられたため、以降の分析では、Yamamura（1999）に基づき、全変数に 0.5 を足した値を対数変換して分析に用いた。

Twitter 上の対人関係　フォロー数、フォロワー数の記述統計を Table 2 に示す。以降の分析では、自分の発信する情報を閲覧する、フォロワー数のみを分析に用いることとした。フォロワー数には分布の偏りがみられ、かつ０回という回答がみられたため、Twitter 利用状況の変数と同様に、全変数に 0.5 を足した値を対数変換して分析に用いた。

他者情報公開経験　他者情報公開に関する 20

Table 2
Twitter の利用状況、Twitter上の対人関係

	M	*SD*	*Min*	*Max*	*Med*	*Mode*	*Skewness*	*Kurtosis*
１日あたりの平均ツイート回数	8.66	44.37	0	1000	2	1	18.00	377.67
１日あたりの平均リツイート回数	2.60	9.46	0	300	1	0	18.39	502.33
フォロー数	271.87	801.10	0	25480	158.5	300	23.14	658.26
フォロワー数	260.21	697.97	0	23658	150	200	21.31	643.53

項目に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値減衰を元に３因子構造が妥当であると考えられた。すべての項目について、一つの因子のみに負荷量が.40 以上であった。最終的な因子パターンを Table 3 に示す。佐藤・太幡（2013）の MPS-I の項目と対応させて考えると、第１因子は自伝的情報因子に含まれる項目で構成されていたことから、“他者自伝的情報公開経験”と命名した。第２因子は、識別情報因子に含まれる項目で構成されていたことから、“他者識別情報公開経験”と命名した。第３因子は、主に属性情報因子に含まれる項目で構成されていたことから、“他者属性情報公開経験”と命名した。各因子の信頼性係数は、α=.80～.90 であった。それぞれの因子を構成する項目を合算し、項目数で除して得点化した。得点が高いほど、情報公開経験が多いことを表す。他者情報公開経験に関する尺度間の相関係数と記述統計を Table 4 に示す。それぞれの尺度間に有意な正の

Table 3
他者情報公開経験の因子負荷量と記述統計量（主因子法、プロマックス回転）

項目	他者 自伝的情報 公開経験	他者 識別情報 公開経験	他者 属性情報 公開経験	*M*	*SD*
他者自伝的情報公開経験（α=.90）					
友人・知人の欠点	**.93**	.10	-.22	0.18	0.59
友人・知人に関する悪口	**.83**	.10	-.19	0.15	0.54
友人・知人の失敗したこと	**.77**	.07	-.04	0.22	0.64
友人・知人の過去の恋愛	**.69**	-.08	.19	0.20	0.63
友人・知人の信条	**.59**	-.16	.31	0.16	0.55
友人・知人の悩み事	**.53**	-.12	.34	0.22	0.65
友人・知人に関する過去の出来事	**.53**	-.05	.28	0.26	0.71
友人・知人の成功したこと	**.51**	.08	.17	0.31	0.77
他者識別情報公開経験（α=.80）					
顔がはっきりと写った友人・知人の写真	.04	**.85**	-.10	0.65	1.03
顔がはっきりとは写っていない友人・知人の写真	.04	**.76**	.01	0.55	0.98
友人・知人のニックネーム	-.01	**.59**	.12	1.11	1.24
友人・知人の本名	.01	**.53**	.13	0.59	1.01
他者属性情報公開経験（α=.88）					
友人・知人の出身地	-.01	-.04	**.84**	0.26	0.72
友人・知人の生まれた年	.04	.01	**.75**	0.23	0.71
友人・知人の所属する学校名	-.05	.22	**.62**	0.38	0.85
友人・知人の住んでいる場所	.11	.08	**.58**	0.24	0.68
友人・知人の趣味	.17	-.01	**.52**	0.51	0.96
友人・知人の所属するアルバイトや部活・サークル名	.01	.22	**.52**	0.50	0.99
友人・知人の性別	-.02	.32	**.49**	0.42	0.88
友人・知人の誕生日	-.06	.37	**.49**	0.50	0.96
因子寄与	8.67	2.43	1.11		
因子間相関　他者自伝的情報公開経験		.32	.64		
他者識別情報公開経験			.59		

相関がみられた（*rs*=.36～.64, *p*<.001）。また、他者識別情報公開経験が他の公開経験に比べて得点が高かった。

Table 4
他者情報公開経験に関する尺度間の
相関係数と記述統計（*N*=2060）

	他者識別情報公開経験	他者属性情報公開経験	*M*	*SD*
他者自伝的情報公開経験	.36***	.64***	0.21	0.49
他者識別情報公開経験	—	.64***	0.73	0.85
他者属性情報公開経験		—	0.38	0.63

***p<.001.

他者情報公開経験を規定する心理的要因　信頼性係数は、PCS の自己のプライバシー意識／維持行動尺度は α=.84、他者のプライバシー意識尺度は α=.60、他者のプライバシー維持行動尺度は α=.63 であった。人気希求尺度は α=.92、犯罪被害リスク認知尺度は α=.79、優越感・有能感尺度は α=.91 であった。各尺度について、項目を合算し、項目数で除して得点化した。心理的要因に関する尺度間の相関係数と記述統計を Table 5、心理的要因に関する尺度と他者情報公開経験に関する尺度との相関係数を Table 6 に示す。

Table 5
心理的要因に関する尺度間の相関係数と記述統計（*N*=2060）

	他者のプライバシー意識	他者のプライバシー維持行動	人気希求	犯罪被害リスク認知	優越感・有能感	*M*	*SD*
自己のプライバシー意識／維持行動	.23***	.04	-.03	.13***	-.00	3.51	0.79
他者のプライバシー意識	—	.20***	-.03	.06**	-.04	3.17	0.72
他者のプライバシー維持行動		—	-.26***	-.11***	-.11***	3.28	0.77
人気希求			—	.21***	.41***	2.89	1.15
犯罪被害リスク認知				—	.08***	2.61	0.81
優越感・有能感					—	2.43	0.79

**p<.01, ***p<.001.

Table 6
心理的要因に関する尺度と他者情報公開経験に関する
尺度との相関係数（*N*=2060）

	他者自伝的情報公開経験	他者識別情報公開経験	他者属性情報公開経験
自己のプライバシー意識／維持行動	-.07***	-.13***	-.08***
他者のプライバシー意識	-.02	-.05*	-.01
他者のプライバシー維持行動	-.11***	-.06**	-.08**
人気希求	.21***	.21***	.19***
犯罪被害リスク認知	.14***	.07***	.12***
優越感・有能感	.15***	.14***	.13***

**p<.01, ***p<.001.

続いて、三つの他者情報公開経験を目的変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。説明変数は、性別（男性=1、女性=2）、年齢、１日あたりのツイート回数とリツイート回数、フォロワー数、自己のプライバシー意識／維持行動、他者のプライバシー意識、他者のプライバシー維持行動、人気希求、犯罪被害リスク認知、優越感・有能感であった。結果を Table 7 に示す。心理的要因に関する結果は以下の三点にまとめられる。（ａ）他者のプライバシー維持行動が低いほど、他者自伝的情報公開経験が多かった。一方、他者のプライバシー意識は、他者情報公開とは関連がみられなかった。（ｂ）自己のプライバシー意識／維持行動が低いほど、他者のすべての情報の公開経験が多かった。（ｃ）人気希求が高いほど、犯罪被害リスク認知が高いほど、優越感・有能感が高いほど、他者のすべての情報の公開経験が多かった。

考察

研究２の目的は、若年層のネット上での他者情報公開を規定する心理的要因を検討することであった。Twitter 上での他者情報公開経験に着目し、他者のプライバシーへの配慮の低さがネット上の他者情報公開を促すという概念モデル（Figure 1）を検証した。得られた結果について、整理、考察する。

他者情報公開経験を規定する心理的要因　分析の結果、他者のプライバシー維持行動が低いほど、他者の自伝的情報公開経験が多いという、概念モデル（Figure 1）に基づく予測を支持する結果が得られた。一方で、その他の結果は概念モデルに基づく予測を支持しなかった。

予測を支持しなかった結果は、以下の二点にまとめられる。第一に、他者のプライバシー維持行動と他者の識別情報、属性情報の公開経験には関連がみられなかった点である。この理由としては、他者のプライバシー維持行動が、他者のプライバシー状態を維持するために他者の会話を聞かないようにすることが含まれることが影響した可能性が考えられる。他者のプライバシー維持行動の項目は、“他者の会話の内容を聞かないようにする”な

Table 7
他者情報公開経験を目的変数とした重回帰分析（N=2060）

	他者 自伝的情報 公開経験	他者 識別情報 公開経験	他者 属性情報 公開経験
説明変数	β	β	β
性別（男性＝１，女性＝２）	$-.05^{*}$	$.19^{*}$	$.05^{*}$
年齢	.03	-.04	-.00
ツイート回数	$.17^{***}$	$.20^{***}$	$.23^{***}$
リツイート回数	$.10^{***}$	$-.06^{*}$	.03
フォロワー数	-.01	$.21^{***}$	$.09^{***}$
自己のプライバシー意識／維持行動	$-.08^{***}$	$-.12^{***}$	$-.09^{***}$
他者のプライバシー意識	.01	-.02	.01
他者のプライバシー維持行動	$-.05^{*}$	-.00	-.03
人気希求	$.14^{***}$	$.16^{***}$	$.13^{***}$
犯罪被害リスク認知	$.10^{***}$	$.04^{*}$	$.08^{***}$
優越感・有能感	$.06^{**}$	$.07^{**}$	$.06^{*}$
R^2_{adj}	$.12^{***}$	$.21^{***}$	$.14^{***}$

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$.

どの項目で構成されている。また、日常生活の自己開示行動に関する研究（e.g, 榎本, 1997）に基づくと、日常の会話で話題になる事柄は自伝的情報に含まれるものが多いと考えられる。以上のことから、他者のプライバシー維持行動と他者自伝的情報公開経験のみに負の関連がみられた可能性があると考えられる。

第二に、他者のプライバシー意識は、他者情報公開とは関連がみられなかった点である。この理由としては、他者のプライバシーを意識しても、実際に他者のプライバシー維持行動をとるとは限らないためであると想定される。他者のプライバシー意識と他者のプライバシー維持行動には、太幡・佐藤（2014b）では有意な正の相関がみられず、本研究においても弱い正の相関がみられたのにとどまった。この結果を踏まえると、他者情報公開を抑止するためには、他者のプライバシーを意識させるように働きかけるのではなく、他者のプライバシー維持行動をするように働きかける必要があると解釈される。

プライバシー意識については、自己のプライバシー意識／維持行動が低いほど、他者のすべての情報の公開経験が多かったという結果も得られた。したがって、他者のプライバシー配慮に関する心理的要因よりも、自己のプライバシー意識／維持行動の方が、他者情報公開経験に対する影響が強いと解釈される。自己のプライバシー意識／維持行動と他者情報公開経験に負の関連がみられた理由としては、一つは、情報公開に対する返報性の影響がみられた可能性が考えられる。返報性に基づくと、他者情報を公開すると、自己情報を他者に公開されると想定される。したがって、自己のプライバシーを意識し、維持したいと考えている者ほど、自己情報を公開される可能性を予期して、他者情報公開を控えた可能性が考えられる。別の理由としては、他者情報を公開するか否かを判断する際に、同じような自己情報を公開された場合を想像して判断するプロセスが存在するという可能性である。他者の心的状態に関する推論は、自己知識を係留点として行われるという、自己中心性がみられるとされている（e.g., Nickerson, 1999）。

人気希求については、人気希求が高いほど、他者のすべての情報の公開経験が多かった。太幡・佐藤（印刷中）と対応させると、人気希求は自己情報公開だけでなく、他者情報公開を促進させる要因となると解釈される。

犯罪被害者リスク認知については、犯罪被害者リスク認知が高いほど、他者のすべての情報の公開経験が多かった。ネット上での自己情報公開を規定する要因を検討した太幡・佐藤（印刷中）でも、本研究と同様に、犯罪被害者リスク認知が自己情報公開を促進していた。自己情報公開の結果に関する考察として、太幡・佐藤（印刷中）は、自己開示欲求が犯罪被害リスク認知も自己情報公開も促進させた可能性を指摘している。具体的には、自己開示欲求が高ければネット上での自己情報公開が多くなり、また、日常生活で他者への自己表出が多ければ自己の姿が他者に目立ちやすくなるため、犯罪に巻き込まれるリスクを高く推測するようになる可能性があると考察している。本研究の結果も、自己情報公開に関する結果と同様に、自己開示欲求が犯罪被害リスク認知も他者情報公開も促進させたと推察される。

優越感・有能感については、優越感・有能感が高いほど、他者のすべての情報の公開経験が多いという、予測を支持する結果が得られた。したがって、他者に対する自己の優越感や有能感は、他者情報の軽視につながりやすいと解釈される。

なお、他者情報公開経験はそれぞれの情報で多くはみられなかったものの、他者情報公開同士に正の相関がみられた。したがって、 他者情報を公開をしている者は、多くの種類の他者情報を公開

していると推察される。

結果の解釈における留意点　研究２で得られた結果の解釈における留意点として、以下の二点が挙げられる。第一に、研究では、公開された他者情報の内容には着目していない点である。したがって、研究１で扱った、プライバシー侵害に関わるような公開された相手にネガティブな感情を喚起するような情報公開以外も含まれている可能性も考えられる。第二に、研究２では Twitter 上での他者情報公開経験に着目したため、他の SNS やツールに着目した場合には異なる結果が得られる可能性がある点である。以上の二つの留意点を考慮し、他のツールを対象にした調査や、他者情報公開の他の指標を用いた調査を積み重ね、今回得られた結果が再現されるか否かを検証することが望まれる。

５．まとめ

本研究では、高校生、大学生といった若年層のネット利用者を対象とし、ネット上での他者情報公開を規定する心理的要因を検討することを目的とし、二つの実証研究を実施した。研究１では、ネット上での他者情報公開について検討した。主な結果として、他者情報公開の問題は、写真や名前といった識別情報の公開に関するものが多いこと、情報を公開した者は公開された者が嫌な気持ちになったことに気づいていない場合が多い可能性があることを示した。研究２では、他者のプライバシーへの配慮の低さがネット上の他者情報公開を促すという概念モデル（Figure 1）に基づき、若年層のネット上での他者情報公開を規定する心理的要因を検証した。そして、ネット上の他者情報公開経験を促進させる心理的要因として、他者のプライバシー維持行動、自己のプライバシー意識／維持行動の低さ、人気希求、犯罪被害リスク認知、優越感・有能感の高さが挙げられることを示した。また、他者のプライバシーを意識させるように働きかけるのでは、他者情報公開を抑制することにはつながらないことを示唆する結果を示した。以上の知見は、ネット上での他者のプライバシー侵害にあたる他者情報公開を抑止する方策につながる有益な知見であると考えられる。

今後の展望として、以下の三点が挙げられる。第一に、本研究の知見を情報リテラシー教育に反映させる具体的方策を示すことが挙げられる。例えば、ネット上のプライバシー侵害にあたる他者情報公開を抑止するための教育プログラムの開発を行うことが考えられる。第二に、本研究で対象とした、若年層以外の年齢層の他者情報公開に関する研究を実施し、本研究の結果と対比させることが挙げられる。例えば、近年、ネット利用者が増加している高齢者や、“ネットいじめ”などの他者情報公開が問題となると考えられる小、中学生を対象にした研究を実施することが考えられる。第三に、公開される他者情報の内容に着目し、詳細に検討することが挙げられる。例えば、他者を攻撃する意図のある他者情報公開と、他者情報の扱い方を知らないことによる他者情報公開を分けることが考えられる。前者のような他者を攻撃する意図のある他者情報公開と、後者のような情報リテラシーに関する知識不足では、ネット上の他者情報公開を規定する心理的要因が異なることも想定される。公開される他者情報の内容に着目すると、若年層のネット上でのプライバシー侵害にあたる他者情報公開を抑止する方策を多面的に示すことにつながる可能性があると考えられる。

６．引用文献

Altman, I. (1975). *The environment and social behavior: Privacy, personal space, territory, crowding*. Monterey, CA: Brooks/Cole.

荒井崇史・吉田冨二雄　(2010).　楽観性がリスク認知、犯罪不安、防犯行動へ及ぼす影響　筑波

大学心理学研究, **40**, 9-19.

Barnes, S. (2006). A privacy paradox: Social networking in the United States. *First Monday*, 11 (9). doi: http://dx.doi.org/10.5210/ fm.v11i9.1394

Christofides, E., Muise, A., & Desmarais, S. (2009). Information disclosure and control on Facebook: Are they two sides of the same coin or two different processes? *Cyber Psychology and Behavior*, **12**, 341-345.

Christofides, E., Muise, A., & Desmarais, S. (2012a). Risky disclosures on Facebook: The effect of having a bad experience on online behavior. *Journal of Adolescent Research*, **27**, 714-731.

Christofides, E., Muise, A., & Desmarais, S. (2012b). Hey mom, what's on your Facebook?: Comparing Facebook disclosure and privacy in adolescents and adults. *Social Psychological and Personality Science*, **3**, 48-54.

榎本博明　(1997).　自己開示の心理学的研究　北大路書房

川喜田二郎　(1967).　発想法――創造性開発のために――　中央公論社（中公新書）

Nickerson, R. S. (1999). How we know –and sometimes misjudge- what others know: Imputing one's own knowledge to others. *Psychological Bulletin*, **125**, 737-759.

小塩真司　(1999).　高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連　性格心理学研究, **8**, 1-11.

Petronio, S., & Durham, W. T. (2008). Communication privacy management theory. In D. O. Braithwaite, & L. A. Baxter (Eds), *Engaging theories in interpersonal communication: Multiple perspective* (pp. 309-322). Thousand Oaks, CA: Sage.

Santor, D. A., Messervey, D., & Kusumakar, V. (2000). Measuring peer pressure, popularity, and conformity in adolescent boys and girls: Predicting school performance, sexual attitudes, and substance abuse. *Journal of Youth and Adolescence*, **29**, 163-182.

佐藤広英・太幡直也　(2011).　インターネットにおけるプライバシー意識と対策行動、被害経験の関連　日本社会心理学会第52回大会発表論文集, 398.

佐藤広英・太幡直也　(2013).　インターネット版プライバシー次元尺度の作成　パーソナリティ研究, 20, 312-315.

太幡直也・佐藤広英　(印刷中).　SNS 上での自己情報公開を規定する心理的要因　パーソナリティ研究

太幡直也・佐藤広英　(2014a).　SNS 上での自己情報の公開と迷惑行為被害経験との関連――mixi 利用者を対象として――　人間科学（常磐大学人間科学部紀要）, **32(1)**, 13-21.

太幡直也・佐藤広英　(2014b).　プライバシー意識尺度の作成　パーソナリティ研究, **23**, 49-52.

Taddicken, M. (2014). The 'privacy paradox' in the social web: The impact of privacy concerns, individual characteristics, and the perceived social relevance on different forms of self-disclosure. *Journal of Computer-Mediated Communication*, **19**, 248-273.

Yamamura, K. (1999). Transformation using (x+0.5) to stabilize the variance of populations. *Researches on population ecology*, **41**, 229-234.